

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00956

研究課題名(和文) 中世民衆史における普遍的思想表出の仏教史的研究 グローバルヒストリーへの架橋

研究課題名(英文) A study of Buddhist history of universal thought expression in the history of Japanese medieval people-linking to a global history study-

研究代表者

上川 通夫 (KAMIKAWA, Michio)

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：80264703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本中世(11世紀後半～16世紀)の歴史的位置を、東アジアないしユーラシア東部という歴史的地域との関係で見定め、約500年間の推移を通じて浮上した民衆思想の歴史的達成を、グローバル視点の歴史認識を不可欠とする今日的課題との関係で明らかにした。紀元前5世紀ごろに南アジアで芽生えた仏教は、紀元前後に中央アジアで大乗仏教化し、ソグド人らが東アジアに伝え、日本列島に定着した。日本古代では国家宗教であった仏教は、中世初期にいたって民衆世界をも捉えた。その歴史的条件下、被支配身分である民衆にとっての主体的・意志的な思想と行動の事例が、断片的・未組織ながら、確かに発信されていたことを証明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

グローバルヒストリーは、今日から将来を展望する上で必要な歴史認識の方法である。それは近現代にだけではなく、前近代にも当てはまる。その場合、国境や民族を越えた人類史の運動の事実を知ること自体の重要性だけではなく、生活者民衆が苦闘の中から普遍的思想を紡いだ事実には絶大な意味がある。外来仏教思想であった「不殺生」(非暴力)、「慈悲」(愛情)、「和合」(平和)などの思想は、断片的に残る民衆の発言史料に確かめられる。それは西洋近代思想が導入される以前の史実である。また今日、仏教用語だと意識されないほど日本語として定着している。しかもなお、その理想は十分に実現していないという課題を私たちに突きつけている。

研究成果の概要(英文)：I have discussed the historical position of medieval Japan in relation to the historical regions of East Asia and eastern Eurasia. For about 500 years in the Middle Ages, the people found ideas of universal value. I clarified that fact concretely. This is important as a historical recognition in today's global age. Buddhism, which sprouted in South Asia around the 5th century BC, became Mahayana Buddhism in Central Asia around BC. The Sogdians brought them to East Asia. Buddhism was established in the Japanese archipelago. At first, Buddhism in ancient Japan was the political religion of the state. And in the early Middle Ages, Buddhism also captured the popular world. However, in the Middle Ages, the people, who were in a position of being ruled, began to show subjective and volitional thoughts and actions using Buddhist thought. Such cases did exist, albeit fragmented and unorganized. I have proved such things.

研究分野：日本中世史

キーワード：民衆史 仏教史 グローバルヒストリー 慈悲 普遍思想

1. 研究開始当初の背景

現代世界の偏りあるグローバル社会を乗り越える叡智について、歴史学からの寄与が必要だと考えた。グローバルヒストリーという歴史像と歴史認識は、1000年、2000年という世界史ないし人類史の長期波動とその諸段階を通観する試みであり、歴史の達成と今日的、将来的な課題を理解させる。すでに歴史学では、前近代史を含めたグローバルヒストリー研究の成果が充実してきていた(妹尾達彦『グローバルヒストリー』2018年、中央大学出版部、など)。

研究対象である日本中世史については、今日にいう「自由」「平和」「人権」といった人類史上の理想価値が、民衆生活の中から自覚的に表出しはじめていたことが、かつてから主張されていた(網野善彦『無縁・公界・楽』1978年、平凡社)。この研究史を、今日の研究水準で重視し、特に前進著しい中世仏教史研究との接合によって再考する条件があると判断した。

紀元前5,4世紀のインドに由来する仏教史との間接的関係を踏まえ、日本中世仏教史研究と日本中世民衆史研究の成果を参照しつつ、古文書・古記録などから「慈悲」(愛情)、「不殺生」(非暴力)、「智慧」(知恵)、「和合」(平和)といった普遍的思想の表出に関わる用語の検出、それぞれの歴史的脈絡の分析、その歴史的意味の考察、という課題を見出した。その際、『愛知県史』『岐阜県史』など自治体史史料編の充実した刊行状況が、課題遂行を可能とする現実的な条件となった。

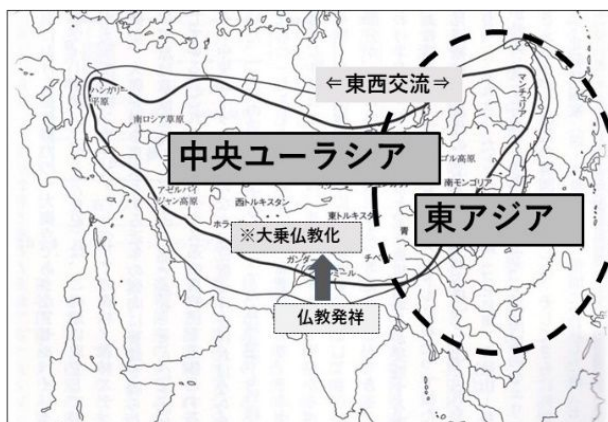
2. 研究の目的

日本中世史は、広域・長期の世界史の一部として、また具体的な民衆生活史の達成として、立ち上がる国家宗教として機能した仏教と対峙する中から、価値理想的な将来展望が見出された時代だと考える。その歴史的経緯を史実考証しつつ、歴史像を再構成するのが、本研究の目的である。そのために、前史としてのユーラシア東部史を踏まえ、特に中央アジア史ないし中央ユーラシア史を視野に入れ、仏教史を主軸にすることで、東アジア史における日本中世民衆史の歴史的達成と後代への歴史的課題を明らかにする。

日本中世(12世紀頃~16世紀頃)は、仏教の時代とも称される。しかし仏教は、南アジアインドに発し、中央アジアからシルクロードを經由して東アジアに導入された世界宗教であってその列島社会への定着がもつ意味は、あらためて考察するに値する。この間の仏教史は、言語・儀礼・造形・思想などでの翻訳文化的な変容をへているが、「慈悲」(愛情)、「不殺生」(非暴力)、「智慧」(知恵)、「和合」(平和)などの普遍的思想はさまざまな歴史的文脈において骨太く継承された。しかも今日の日本語においてそれらは仏教語だと意識されないほど、むしろ社会に定着している。

このような歴史の省察を、ひずみ大きい今日のグローバル世界の行方を展望する参考に供するのが目的である。

【図】小松久男他編『中央ユーラシア史研究入門』(2018年、東京大学出版会)所収図を加工



3. 研究の方法

(1) 文献史学の方法により、日本中世の主に民衆自身による陳述史料から、「慈悲」(愛情)「不殺生」(非暴力)「智慧」(知恵)「和合」(平和)などの文言や内容を博捜し、個別の歴史的脈絡を復元しつつ、非暴力平和の人権思想という人類叡智としての歴史的意味を考察した。

(2) ユーラシア東部史という歴史的世界に注目した。仏教発祥地である南アジアのインドについて、日本中世史研究では観念的に位置づけるにとどまり、中央アジアないし中央ユーラシアと東アジアの関連は、十分に説明されていない。特に、紀元前後に大乘仏教を生んだ中央アジア地域への視野が抜け落ちており、大乘仏教を含む文物を東アジアに伝えた中央アジアのソグド人などについてあまり考慮されず、その活動域に当たるシルクロード地域を通過点と見なす傾向が強い。しかし日本中世民衆が、生活実感から見出した将来への理想価値は、大乘仏教の用語に託して表現された事実がある。この点を踏まえた史実検索と歴史像再構成を方法的に組み込んだ。

4. 研究成果

(1)ウズベキスタン共和国での調査と研究

2019年に3回ウズベキスタンを訪問して現地調査と研究者交流を行い、同国とユネスコとの共催国際学会「有形および無形文化遺産の保存：現在の問題とそれに対する戦略」(サマルカンド市)で報告した('Possibilities of Mutual Understanding for "New" Culture :A Perception of The Historical Relations between Uzbekistan and Japan'「歴史の復元と文化の創造 ウズベキスタンと日本のつながり」『愛知県立大学日本文化学部論集』11、177-188ページ)。その後、勤務先愛知県立大学とタシケント国立東洋学大学とで交流協定を結んだ。

2023年2月にはタシケント東洋学大学はじめ5大学を訪問し、うち4大学において次の題目で研究成果を講演した。「日本中世史における普遍的叡智表出の仏教史的研究」(於タシケント国立東洋学大学)「Historical relationship between the Eurasian world and the Japan Archipelago: A world that encompasses Uzbekistan and Japan」(於ウズベキスタン国立世界言語大学)「歴史と天皇 縦軸で考える」(於サマルカンド国立外国語大学)「ウズベキスタンと日本を包む歴史的世界」(シルクロード国際ツーリズム文化遺産大学)。

なおサマルカンド国立外国語大学とは大学間協定を締結するとともに(2023年7月予定)2023年5月より同大学准教授クルボノヴァ・グルノザ氏(専門は日本古典文学と比較文学研究)を愛知県立大学客員共同研究員に迎え、受け入れ教員として共同研究を開始することで(課題名「ウズベキスタンと日本を包む比較文化史的研究」)今後の継続的研究の条件を整備した。

(2)国内の学会での報告と論文公表

グローバルヒストリーの視野での研究として、以下の成果を発表した。

- ・「日本中世仏教と民衆思想 ユーラシア・東アジア・列島諸地域」(国際日本文化研究センター、京都市、口頭報告、2019年)
 - ・「日本中世の即位灌頂 アジア仏教史と民衆仏教の狭間」(日本密教学会大会、口頭報告2019年と論文2020年)
 - ・「Manifestation of People's Will in Medieval Japan: Modality and Thought」(論文2020年)
 - ・「六、七世紀における仏書導入」(論文2021年)
- 中世民衆思想に関する研究として、以下の成果を発表した。
- ・「中世の巡礼者と民衆社会 可能思想としての外来仏教」(口頭報告と論文2022年)
 - ・「銘文と仏書からみた中世の民衆」(口頭報告2022年と論文2024年予定)
 - ・「勸進帳・起請文・願文」(論文2022年)
 - ・『延命寺(愛知県大府市)大般若経調査報告書』(共著2022年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 上川 通夫	4. 巻 13
2. 論文標題 勸進帳・起請文・願文	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知県立大学日本文化学部論集 = Bulletin of School of Japanese Studies Aichi Prefectural University	6. 最初と最後の頁 111 ~ 133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15088/00004845	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 上川通夫	4. 巻 52
2. 論文標題 日本中世の即位灌頂 アジア仏教史と民衆仏教の狭間	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 密教学研究	6. 最初と最後の頁 1,27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Kamikawa, Michio	4. 巻
2. 論文標題 Manifestation of People's Will in Medieval Japan: Modality and Thought	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Relacoes entre a Iberica Relacoes entre a Peninsula eo Japao	6. 最初と最後の頁 185,195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 上川通夫	4. 巻 11
2. 論文標題 歴史の復元と文化の創造 ウズベキスタンと日本のつながり	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛知県立大学日本文化学部論集	6. 最初と最後の頁 177,188
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15088/00004281	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 上川通夫、井筒康人、加藤昌生、河西秀哉、廣瀬憲男、堀田慎一郎
2. 発表標題 合評会・歴史学研究会編『コロナの時代の歴史学』
3. 学会等名 名古屋歴史科学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上川通夫
2. 発表標題 中世の巡礼者と地域社会 可能思想としての外来仏教
3. 学会等名 ムラの戸籍簿研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 上川通夫
2. 発表標題 Possibilities of Mutual Understanding for "New" Culture : A Perception of The Historical Relations between Uzbekistan and Japan
3. 学会等名 ウズベキスタン共和国・ユネスコと共催国際学会「有形および無形文化遺産の保存：現在の問題とそれに対する戦略」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上川通夫
2. 発表標題 日本中世仏教と民衆思想 ユーラシア・東アジア・列島諸地域
3. 学会等名 国際日本文化研究センター・共同研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上川通夫
2. 発表標題 日本中世の即位灌頂 アジア仏教史と民衆仏教の狭間
3. 学会等名 日本密教学会大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 上川通夫
2. 発表標題 銘文と仏書からみた中世の民衆
3. 学会等名 中世地下文書研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山尾 幸久	4. 発行年 2021年
2. 出版社 塙書房	5. 総ページ数 452
3. 書名 古代日本の民族・国家・思想	

1. 著者名 伊東 貴之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 948
3. 書名 東アジアの王権と秩序	

1. 著者名 愛知県立大学中世史研究会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大府市歴史民俗資料館	5. 総ページ数 102
3. 書名 延命寺（愛知県大府市）大般若経調査報告書	

1. 著者名 Teixeira,Hiroaki Kawabata,Isabel dos Guimaraes Sa	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Centro de Estudos Lusiadas UNIVERSIDADE DO MINHO	5. 総ページ数 238
3. 書名 Peninsula berica eo Japao : do sec. aos dias de hoje	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------